



「フォーチュン フラワーズ」 2017 / acrylic on canvas
©Ellie Onishi, courtesy of Tomio Koyama Gallery

「作業、読書田、『讀書』なども書籍を「読む」こと」（文部科学省編『新日本国語辞典』）
『文部省用語』、失笑工作など「なんとか生きて」ます」（星野道夫著『星野道夫の政治小説』）
が教えられていました。星野道夫著『星野道夫の政治小説』は「政治小説刊行会」で発行されたものでした。星野道夫著『星野道夫の政治小説』は「政治小説刊行会」で発行されたものでした。
現在、「ヤンマーライフ」の書名を抱いて、星野道夫著『星野道夫の政治小説』は「政治小説刊行会」で発行されたものでした。
にじて美術館の初の展覧「コンシニアード・ユアーズ」で開催され、星野道夫著『星野道夫の政治小説』は「政治小説刊行会」で発行されたものでした。
開催後、星野道夫著『星野道夫の政治小説』は「政治小説刊行会」で発行されたものでした。
は六甲ミーツ・アート・若林散歩2018に登場。

情じしないお見舞いに驚いて一人で月見の席を立つ。窓を開け放ち、テーブルにお皿とお酒と大きな花瓶。スキキ、大胆にガバッと入れる。さあ、即席お月見の始まりである。たゞ一ヶ月が出ていないつもりである。秋の音色が部屋中に響き渡り、心に月がかかるのはほってくる。楽しくなつてフォーチュンフラワーズという絵を描いた。

四

月見のアスギ

卷之三

秋の季節

秋の花、といわれてすぐ思いつくのはやはりスキ。一番秋を感じるスキは、尾花と呼ばれるそう。豊かな実りと無病無災祈るために月見には欠かせない花。縁起のいい目出度い花のくせに、なんだかこう使い感じ、質素な感じがない。質素なお月見に、要し、なくではない花。この花がないと始まらないのである。そんな存在つこすごく不思議である。だいたい裏になくてはならないという、華やかな存在ではなくらうか。人間も花も。パーティーで人気者といえば、質素堅実な人柄ではなく、派手で明るく元気なタイプであろう。スキは華やかとは程遠い。ただ、爽快、豊潤、という言葉そのものを、素直に堅実に放っている。黄金の輝き、穂のふくらみ、羽のようだ、などびく。

秋風が心地よい。ああ、秋になったな
と夜風が知らせてくれる。雲ひとつない
空にまあるいお月様がおはします。家の
中の喧騒が漏れ聞こえる中、一人外にい
る悦楽。贅沢である。お月様を独り占め
である。みんなは気づかない、こんなに
贅沢な時間がここにあるのに。その抜け
駆け感がまた、一層豊かで愉快なのであ
る。たった一人、お月見なのである。
全然寂しくはないのは、その目の前に
たくさんの客人がいるからだ。(スキ)
群生。彼らが楽しそうに風に吹かれて氣
持ち良さそうである。風流とはこのこと
どこからか音楽が。笛の音色が聞こえる
楽しそうである。スキたちがゆらゆら
と揺れている。体をゆらしている。
風が強いか 変が出てきて、あつと
いう間に月を躊躇。これもまた一興。じっ
と見ていると、雲の後ろに白い月が見え
る。雲の影。月影。あつという間に月が
に出る。縁側から庭に降りて、月を見上
げるのである。

月といふものは面白くて、満月は満月でも、白っぽいとき、銀色のとき、金色のとき、オレンジがかったとき、やけにチーズのように黄色いときなど様々である。大きさも違うつうに思う。そんな月を古の時代からずっと見てきたと思う花、ススキ。そう思う理由は、野外で群生しているせいなのか、その姿形が月の光を受けて光るせいなのか、絵や屏風に月とともに描かれてきたせいなのか。どんな時代、どこ吹く風。万葉集の時代も、戦国時代も、いろんな時代の月をじっと見てきたススキに、私は口蔓とリスペクトを感じるのである。

私が決まってするお月見の楽しみ方がある。ススキの群生の前にきて、しゃがみこむのだ。すると、ススキの向こうに月が見えるのだ。ススキの間に月が見え隠れする。ススキたちが風を受けてまるで銀色の服のようだ。月を見せたり、隠したりするのだ。そうするとそこから何か銀の尻尾をもった狐様が出てきそうなそんな神々しい気持ちにもなる。神様の御を出す。同事もなかつたかのよう、またまんまるの月。

2018 AUTUMN

草月

SOGETSU